



FIELD NOTE

no. 88 Mar.



特集

古写真を手に、まちへ

そこに咲き続けていること
人と滝が生きていること
「始」と「終」
―受け継がれる道祖神祭り―
種さえまけば
水路橋との思い出
どこでだって水浴び
人の暮らしのそばにいた
ある建物の物語 都留市商家資料館
都留の桜の風景
アルバムをひらくと

— 特集 —

古写真を手に、まちへ



- 10 そこに咲き続けていること
- 11 人と滝が生きること
- 12 「始」と「終」 —受け継がれる道祖神祭り—
- 13 種さえまけば
- 14 水路橋との思い出
- 16 どこでだって水浴び
- 18 人の暮らしのそばにいた
- 20 ある建物の物語 都留市商家資料館
- 22 都留の桜の風景
- 24 アルバムをひらくと

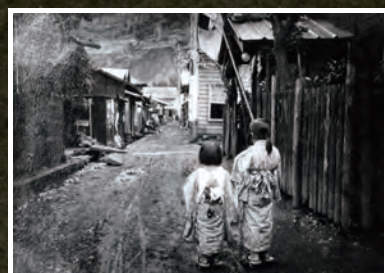
- 27 「ただいま」を言いたくなるお店
- 30 左官職人の手仕事 —壁は、怖さと面白さの間で作られる—
- 34 都留という居場所 賀川一枝さん
- 38 教えてください！ 遊びの思い出 第三回
女の子だって遊ぶのよ
- 40 研究者が語る都留の魅力 第2回
富士山から湧水が届くまち 2
- 41 つるのひとこま
- 42 フィールド暦
センサーカメラが写した動物たち
- 43 ムササビ観察日記
- 44 都留にいた組子職人
- 45 Field・Note News



表紙の写真（撮影：小俣溪和）
昭和30年代のカメラ。都留市にお住まいのかたが大切に保管している。

都留文科大学地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門では、地域の自然や人々の暮らしの知恵をじかに学ぶことが大切だと考えています。そこで、現場に出かけ、ていねいに観察し、記録し、その成果を共有する活動をしています。その一つが、学生が主体となって編集し発行している『フィールド・ノート』です。この冊子はフィールド・ミュージアム部門の機関誌として、県内外の読者にお届けしています。





古写真を手に、まちへ

古写真には、
忘れかけられた記憶を
呼び覚ます力があります。
その時代に生きていなくても、
さまざまな想いを
かきたてられます。
わたしたちは、
そんな古写真を手に
まちへ出てみました。
何が変わり、
何が変わらなかったのだろう。
そこにどんな物語があったのだろう。
これから
どのような変化をしていくのだろう。
古写真が語りかけてくるものに
耳を澄ませ、
都留の過去から今、
そして未来を見つめる
旅の始まりです。

FIELD MAP



フィールドとは？
定期的に足を運び、親しみを深めていく場所をわたしたちは「フィールド」と呼んでいます。

山梨県都留市

面積 161.63km²
総人口 31,474 人 (2016 年 2 月 1 日現在)

足元の水路には富士山の湧水が流れ、身近な森ではムササビとの出会いを楽しめます。山梨県都留市は、自然と人の暮らしを近くに感じることができる地域です。



横町を見つめる
都留市中央



上：戦前 / 下：2016.01.31
目の前を横切るのは県道高畑線だ。古写真には通りが行き止まりになっていたとそえられていたが、現在は 139 号線に繋がっている。また、資料には「美映写真館前」と書かれていた。その美映写真館付近に、今では「和風カレーさや」が建っている。



田んぼでスケート
都留市田原



上：戦前 / 下：2016.02.02
西願寺の前にある田んぼ。昔は冬になると田んぼに水を張り凍らせ、学校帰りの子どもたちがスケートをして遊んでいたという。今は田んぼに氷はなく、スケートをしている人もいない。



上：戦前 / 下：2016.01.15
上谷のケーキ屋「ジョージワシントン」前のY字路を谷村町駅のほうへ進むと見られる風景。舗装されているこの場所に、かつては川が流れ柳田橋がかかっていた。柳田橋からはお城山が望めたが、現在は住宅が建ち並び、隠れている。

柳田橋より城山を望む 都留市上谷



上：戦前 / 下：2016.02.08
古写真の説明には「川棚橋を吊り橋にかけ替えのときと思われる」とある。現在、戦前の写真で写っている下の橋はなくなっており、橋の名前も城南橋と変わっていた。城南橋は車が通ることができる橋に変わっていた。

城山付近の光景 都留市川棚

古写真を手に、初取材へ②

人と滝が生きていること

窪田りさ（社会学科1年）＝文・写真



戦前の田原の滝

桂川がつくり出す『田原の滝』は、松尾芭蕉が「勢ひあり 氷消えては 瀧津魚」の句を詠んだことで有名である。しかし、かつて芭蕉が見た滝と現在の滝は大きく異なる。溪岸崩壊や滝の後退を何度も繰り返し、昭和33年にはコンクリートの砂防堰堤が設置された。のちに人工の「柱状節理」（※）がつくられ、景観が整えられたが、田原の滝は「人に手を加えられた滝」となってしまったのである。そんな滝について、いま何を想うのか。1月27日、近所のかたにお話をうかがった。

杉本昭さん（80）は、ずっと滝のそばで暮らしているという。このあたりのことなら何でも教えてやれるぞという感じで、多くを語ってくださる。あたたかい雰囲気のかただ。杉本さんは、「滝があつてよいことはな

いね」と笑う。滝のそばの「佐伯橋」ではないまも工事がおこなわれているし、しぶきのせいで洗濯物が干せないこともあるそうだ。杉本さんは、住人の意向が聞かれないうまま、身近な自然が変えられてきたことに抵抗があるという。せつかく形を変えるのだから、もつと多くの人が訪れる場所になつて欲しい。滝があつてよいことはないと言いつつ、滝への愛情はしっかりと伝わってくる。杉本さんにとつての田原の滝は、手のかかる息子のような存在だと私は感じた。

60代の女性からお話を聞くことができた。このあたりに住んで4年ほどだという。自然が大好きな、明るさとかわいさのあふれるかただ。女性の家からは滝の音がはつきりと聞こえてくる。田原の滝は「自慢の滝」。初めて滝を見たとき、「なんてきれいなのだろう」ととても感激したそうだ。しかし、あとから柱状節理は自然のものではないと知り、一気に興ざめ。それでも、田原の滝はお金に代えがたいものであり、この景色を見ない日はないという。自然の近くに住むことは魅力的に思えるが、女性は今まで自然の恐ろしさも味わってきた。昨年9月の台風では、



2013.05.25

すさまじく速い濁流が桂川に押し寄せ、足がすくむくらい怖かったそうだ。いくら美しい自然でも、ときには人間に猛威をふるうこともある。最後に女性は、「田原の滝はずっとこのままであつて欲しい。人に災害が及ばないでね」とおっしゃった。

田原の滝に近づいてみた。「ぎあああ…」

滝の音が耳に響きつづけ、すべてがかき消されてしまう。小さな水しぶきが飛び散り、そのひとつひとつが光に当たってきらきらと輝く。さわやかな風とかすかな潮の香り。ふしぎと海を連想させる。絶え間なく流れる水には、惹きつけられるほどの迫力がある。人工の滝だとわかっていても、やっぱり美しい。そんな滝だからこそ、人は共に生きたいと思うのだろう。

古写真を手に、初取材へ①

そこに咲き続けていること

黒澤瑞保（比較文化学科3年）＝文・写真



1994年4月14日 撮影

都留市在住の安富一夫さん（89）に大手通りの桜についてお話をうかがった。大手通りの桜は、昭和10年くらいに地域の人によって植えられたのではないかと。春以外の季節の大手通りの様子は、ふだんはとくに何もなく広い通りだった。まちの真ん中に桜並木があるのは当時でも珍しかったそう。桜が咲くと、広場で横山呉服店というお店が売り出しをしていて、賑わったらしい。通りに咲く桜ということもあり、花見をする

といったことはなく、その道を通るだけといった感じだったと安富さんは言う。

安富さんは80歳を超えているけれども、非常にお元気なことで次から次へと大手通りの桜のほかにもいろんなお話を聞くことができた。大神社の夜桜のこと、お城山の桜は15、6年前にまた植樹されたこと。鹿留発電所の桜は手入れがされていて、今でも綺麗なところなど。思わず圧倒されて大手通りの桜について聞くタイミングを失ってしまったほどだった。友人や子どもたちと鹿留の桜に花見に行つたことも楽しそうに話してくださった。

桜という花見というイメージをもっていた。よく友人たちと桜が咲くと近くの公園に花見に行つていたからだ。幼いときには桜の木で鬼ごっこをしたり、時には屋台の食べ物に夢中になつて花より団子になつていたり……。安富さんのお話では、大手通りの桜はその道を通るさいに見るくらいというところで、私の花見のイメージとは少しちがっていた。私にとつての桜は、友人たちとの楽しい時間のなかにあつた。

古写真を持って大手通りを歩いたことと



2001年4月11日 撮影（ミュージアム都留＝写真提供）

くに気にせず通つていたあの通りを以前よりゆつくり通るようになった。大手通りの桜は昔から現在まで都留で毎年咲き続けている。桜の名所というわけではないものの、そこで咲き続けていることに価値がある。都留というまちを語るひとつの歴史なのだ。現在は伐られてしまった桜の木もあり、昔のような桜並木ではなくなつてしまつたけれども、桜の舞う景色を見る日が今から待ち遠しい。

古写真を手に、初取材へ④

種さえまけば

菊池香帆（初等教育学科1年）＝文・写真



1944 年ころ撮影された西願寺の境内

戦中・戦後の西願寺。広い境内は当時の食糧不足を補うためにイモ畑になっている。現住職の大江信彦さん（74）に境内が畑になっているお話を、うかがった。

「写真の中央に立っているかたは2代前の住職さんで、多くの祖父に当たります。祖父は写真に凝っていたらしく、この写真も祖父の写真仲間が来たときに撮ったものかな。畑で作業している子どもはおじおばたちです。このころは土地を持つている人は山でも道でも畑にしたそうです。」

西願寺では境内を耕し、畑にして食べ物を作っていました。写真の右手はソバ、奥はトウモロコシ。のちに保存が効きお腹にもたまるサツマイモを作っていました。イモは、サイコロ状に切り、いだお米と一緒に炊き込み、芋ご飯として食べました。特別おいしいものではなかったけれど、当時、都留には田んぼや畑があつたから、都会とは違って自給自足できるぐらいの食糧は作れたのです。

それでね、一昨年の大雪のとき思ったんですけどね、お店に食べ物を買いに行っても棚はガラガラでつて感じだったけども、年寄りにはあのとときね、しばらくしたら道路が空くし、種をまきさえすれば食べ物を作る、つて感覚だったわけ。けどもちいちゃい子どもがいるご家庭とかはそんなこと言つてられないから、買い出しに皆さん来て大変だったらしいですよ。戦後の食糧不足のときは、みんな自分で種をまいて食べるものを作っていたけど、今は自給自足をしなくなったから、スーパーに食べ物がないだけでどうすればいいかわからなくなっちゃうんじゃないかな。まあ、結局この写真の時代は、食べ物がなければ蒔こう、おいしくなくてもとりあえ

ず食べよう、腹が減つてもいつかは食べられるつて言う時代だったんですよ。だから、お年寄りなんかはこういう時代を過ごしてきてるから何日か経てばなんとかなるよつて、けども今の人は今が大変になっちゃうてるからね。」

最初、戦中・戦後の食糧難と聞いただけで、辛い写真と考えてしまったが、お話をうかがううちに違うものに見えてきた。厳しい現実も、なんとか乗り越えたかたがたが体験されたこと。「少し待てば、種を蒔けば、きっと状況はよくなる」という希望の写真に。



2016 年 2 月 7 日に撮影した西願寺の境内

古写真を手に、初取材へ③

「始」と「終」―受け継がれる道祖神祭り―

福元明梨（国文学科2年）＝文・写真



渡辺さん宅の玄関に飾られたヒイチ

江戸時代から続く、十日市場の道祖神祭り。鹿児島出身のわたしにはなじみがなく、古写真ではじめてみた「梵天竿」が深く印象に残った。そこで実際に十日市場へ行き、偶然出会った自治会長の渡辺敏博さん、國子さん御夫婦にお話をうかがった。

現在、毎年15人ほどの男性が中心となつてのぼりざおをたてる。その高さは13メートルにも及ぶ。女性たちは、ヒイチとよばれる三角の座布団状の魔よけや紙の飾りなどを作る。それを幾重に重ねられたひし形の縄に結びつけると、梵天竿の完成だ。小正月の1月12日に制作を開始し、15日には倒して燃やす様子を見守り、無病息災などを祈る。その後ヒイチは各家庭に配られ、十日市場を歩くと玄関先にさまざまなヒイチを見ることが出来る。1年間飾つたヒイチや正月飾りなどを燃やすドンド焼きもあわせて開催され、そのさ

いには地域の住民が集まつてお団子を焼いて食べるのが古くからの風習だという。各家庭で作るものであつたが、今はほとんどボランティアのかたがおこなうそうだ。

記憶の中の道祖神祭り

渡辺國子さんは幼い頃からこの地で育つた。そんな國子さんに昔と今で変化したことをつたねた。「ほとんど変わっていないのよ」。大きな瞳をすうつと横に伸ばし、こちらも笑顔になるような表情でこたえてくれた。「こうつてずっと続いているのつて、とつても素敵よね」。おもわず大きく頷く。しかし、変化はあるようだ。昔は十日市場の名にあるように、商人が多かつた。湧水がわくことから百姓も多く、祭りにあわせて各家庭でお団子を作つたり、休みを取ることが出来た。現在ではほとんどのかたが会社勤めで、なかなか参加できないのが現状だという。「だからね、わたしみたいなおばあさんたちが、お団子を作つたりして子どもたちにあげるのよ。」少女のようにくすつと笑つて國子さんはいう。現代では現代なりに、工夫して祭りを引き継いでいる。

「賽」の神様



平成6年に十日市場で撮影された梵天竿

「その部落の『入口』にあるのが道祖神ですね。だから『賽の神様』とも呼ぶんです。」渡辺敏博さんがゆつくりと丁寧に教えてくれる。「始まり」という意味をもつ『賽』。年の始まりの行事であること、その地域の入口に祀られる神様であることから、この地域では口に馴染んだ呼び名だそう。十日市場の風土史をめくりながら説明してくださる敏博さん。分厚い本からすぐに目当ての頁を引用される姿からこの地への深い愛を感じた。「でもこのお祭りが終わると、もうお正月気分はおしまいです。よし、また縁がなくちゃ、とね。」始まりと、終わり。道祖神祭りは地域の方にとってけじめのお祭りなのだ。



橋の下の小さなトンネル



橋の上部。今は網がかかっている

るための高さ2mくらいの小さなトンネルがある。短いトンネルを抜けると民家が並ぶ道に出る。ふだんは遠くから見ていただけたので、こんなに近づくことや近くに家があることに驚いた。ずっと昔からそこにある橋。近くに住む人にとってはどんな存在なのだろうか。一番近くのお宅のかたにお話を聞いた。

お話をうかがったのは村松正治さん（70）。「水路橋の今と昔のことについてお話を聞きたいのですが」と尋ねると「あんまり変わっていないねえ。昔からずっとこのまんまだよ」とすぐにおっしゃった。そのあとに、家の目

の前の道を指して道幅がもつと狭く、舗装されてなかったと続ける。「1mぐらいでリヤカーが通るくらい」。車が走るようになって今の幅になり、舗装もされたそう。それが今との違いだなとおっしゃる。

橋のある暮らし

村松さんに橋について思い出があるか尋ねると、少し考えてから、昔はこの水路橋の端のそこを通って国道に出ていたとおっしゃった。国道に出るには近道なので、いつもこの道を使っていたという。現在は橋の両端にフェンスがあり無断では入れないようにになっている。昔はフェンスなんかなかったそうだ。

今は水路橋の上にも網がかかっているが、これも昔はなかったそう。そこでふと思いついたように「歩いていった先に、水門があったな」とおっしゃった。古写真を確認してみると、確かに水門のようなものが写っている。現在、その水門はなくなっている。お話の終わりに村松さんが隣の家に住むかたを紹介してくださった。小笠原敬子さん（82）だ。

「橋のことについて……」ときりだすと小笠原さんもすぐに「あんまり変わわないね

え」とおっしゃる。橋についてなにか思い出はあるかお聞きすると、村松さんのように昔は橋の上を歩いて国道に出ていたことのほかに、「冬になるとこんなつらがはっちゃつて」と手を大きく広げながら教えてくださった。今できるものよりももつと大きかったそう。加えて「昔からじゃないけど」と言いながら、今はコケ取りをしていることも教えてくださった。業者さんが機械を使つて掃除をしているところを見るそう。だ。「1年か2年にいったんぐらいで、ここ20年前ぐらいから始まったんじゃないかな」とおっしゃる。

お二人の「あんまり変わっていないねえ」というお言葉が印象に残っている。橋が変化して近くに住む人の関わりかたも変わった。でも、身近なものであることは変わらないのだろう。これから数年後、数十年後には近くに住む人の、橋とのどんな思い出が聞けるのだろうか。

小俣溪和（社会学科2年）Ⅱ文・写真

【参考文献】
渡邊保『郡内電力史「灯」』1987年
都留市郷土研究会『第二・二三号「郡内研究」合併号都留市地名辞典』2012年



上：戦前に撮られた「桂川水電落合橋制水門」下：現在の「駒橋発電所落合水路橋」（1月5日撮影）

水路橋との思い出

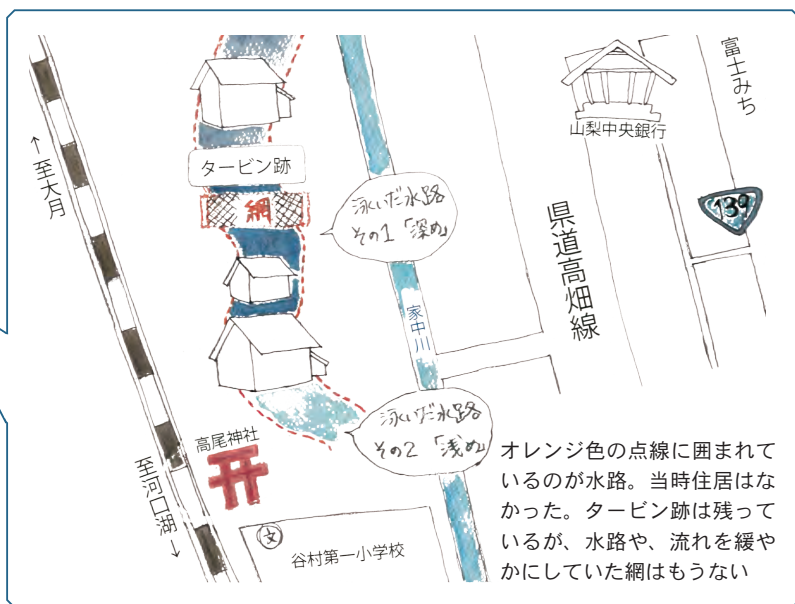
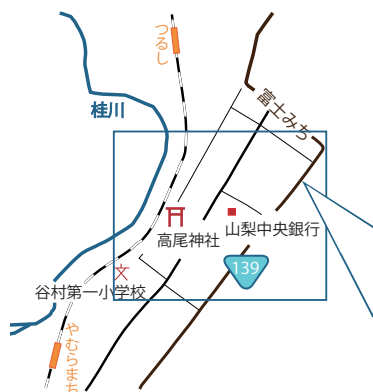
『奥隆行写真コレクション』（※）を眺めているとき1枚の古写真に目がとまった。どこかで見たことがあるような橋の写真。資料を見てみると、タイトルには「桂川水電落合橋制水門」とあった。

※奥隆行（おくたかゆき）氏が生前保存されておられた写真とデータを、地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門がデジタル化し、冊子として整理したもの。4058枚の写真が収められている。

現在、橋の名前は「駒橋こまはし発電所落合水路橋」となっている。建設されたのは1907年（明治40年）。レンガ造りで3連のアーチが特徴だ。メガネ橋と呼ばれることもある。長さは56m、幅は8.5m。東京電灯（現在の東京電力）が市内にある川か茂も発電所ダムで取水した水を、大月にある駒橋発電所で発電用水として利用するために建設した水路橋だ。今は国指定有形文化財となっている。

橋の現在

古写真を見て橋に興味をもったので、じつさいに橋へいつてみた。レンガのくすんだ茶色や黒色から古いものである印象を受けたが、荒廃したようすは見られない。むしろどつしりとしていて貫禄があるように見える。国道から外れて、橋のほうに続く道がある。もつとよく見てみようと思いついてみた。その道と橋がまじわるところには、橋を通り抜け



オレンジ色の点線に囲まれているのが水路。当時住居はなかった。タービン跡は残っているが、水路や、流れを緩やかにしていた網はもうない

どこでだって水浴び



三の丸水路は旧谷村町に流れる家中川かみちがわを水源にしていた。だから家中川のすぐ隣を平行するように流れていたそう。今はコンクリートで埋められていて、その上には住居が建っている。

三の丸水路についてうかがうため、高尾町周辺に住むかたがたに写真（左ページ右下写真）をお見せして当時のことを尋ねた。すると、写真をご覧になった複数のかたが高尾神社の入り口にあった橋だとおっしゃった。古写真の水場は家中川だったようだ。となると水路で泳いでいたというのは間違いだったのだろうか。

ケガだって気にしない

しばらく調べていると、三の丸水路があった周辺で、じつさいに泳いだことのある70代の男性にお会いできた。

今から70年近く前、高尾町にある三の丸水路を水浴び場に使っていたことがあった。『奥隆行写真コレクション』には「絶好のプールだった」と書かれている。どうして水路が水浴び場になったのだろう。誰がそこで遊んでいたのだろう。

高橋未瑠来（社会学科2年）＝文・写真

男性は小学校2、3年生のころに泳いだ記憶があるという。泳いだ場所は家中川の隣を流れる水路。じつさいに水路で泳いでいた人はやはりいたのだ。さっそく泳いでいた当時の思い出を話していただいた。

男性によると泳げる場所は2カ所ほどあり、片ほうは浅く、もういっぽうは自分の身長よりも深かったとか。その2カ所は幅2、3mくらいの「ゴミため場」だったそう。ゴミをためるために網が張られていた。それが流れをおさえていたので水浴びしやすかったようだ。けれど、ゴミのなかにはガラスや陶器の破片もあったそうで、流れてくる破片で足やお腹に傷をつくっていたそう。どちらかといえば浅いほうでのケガが多かったとか。逆に、水底の深いほうでは飛び込んだりしなければケガをすることもなかったそう。でも、みんなケガなんて気にしていないか

らしよっちゅう飛び込んで傷をつくって、足でガラスを踏んづけては傷をつくって、というのを繰り返していたという。学校の先生には危ないからと怒られていたが、それも気にしなかったそう。

裸で泳いだ思い出

当時は水着なんてものはなかったから裸になって泳いでいたと男性はおっしゃる。家中川と三の丸水路の境に土手があって、そこに鞆や服を置いていたそう。それなら女の子はどうしていたのかと尋ねると、女の子は足をつけるくらいで泳がなかったという。当時泳いでいたような子どもはみんな「ろくでもないあたぼう。ばっかりだったからな」とおっしゃる。「あたぼう」というのはいたずらっぽい子どもを指している。川で遊んでいたのはやっぱり子どもたちが多かったようだ。

桂川でも泳いでいた

水浴びは三の丸水路だけでなく、桂川でもやっていたそう。自転車に乗っていた子が勢いのあまり川にそのまま落ちてしまったこともよくあったとか。そんな危ないことがよく起きるものだろうか疑問に思ったけれど、当時の子どもたちにとってはそれほど危険なことではなかったという。落ちてしまっても川の流れを利用して自転車ごと起き上がる術を持ち合わせていたそう。ときおり起き上がれない子がいると、みんなでわいわいしながら引き上げたなあ、と懐かしそうに話してくださった。

桂川でも泳げたのであれば、なぜわざわざゴミのたまった三の丸水路で泳いだりしたのか。疑問に思い聞いてみると、泳ぐのは目の前に水場があったから、と答えてくださった。プールのように整備されていなくても、水場さえあれば遊べた。私たちが考える泳ぐために必要なものが揃わなくとも、子どもたちの気持ち次第でプールにだって何にだってできたのだ。



古写真に写る橋があったと思われる場所。川の半分を埋めて道を広くしたので、昔とはようすが違っている (2016.02.24)



橋から裸で川に飛び込んでいる男性。当時はふんどし一枚で水浴びする子どももいたそう

人の暮らしのそばにいた

『奥隆行写真コレクション』で目に留まったのが、今はなかなか見られない、馬が畑にいる風景。写真は戦前のものだそうだが、ここで撮られたかは分からない。この場所の今を知るのは難しそうだ。けれど写真に撮られた時代を知っている人なら、こんな風景を見てきたかもしれない。

舟田早帆（社会学科3年）Ⅱ文・写真

わたしの知人に戦前や戦中から生きていて、なおかつ農業をしているかたはいない。農家の知り合いは農家にいるはずと考え、取材やイベントでお世話になった、都留市宝地区の農家の羽野幸^{はのさち}さんに相談した。羽野さんが農家の先輩の安田さんにも聞いてくださり、小林圭一^{こばやけいち}さん（81）という、戦前からの記憶をもっているかたを紹介していただけることになった。

1月26日、羽野さんと安田さんに同行してもらい、中津森にある小林さんのお宅にうかがった。小林さんとその奥さん（75）にお話を聞かせていただく。

わたしが持ってきた写真をお見せすると、馬がなにかを引いて畑を歩いている写真をさし、乾いた畑の土をおこしているところだと教えてくださる。「あらおこし」という作業で、すぎという道具を使っておこなうそう。写真をちよつと見ただけでも、なにをしているかが分かるものなのか。

馬の仕事

小林さんいわく、馬がよく飼われていたのは50年ほど前までらしい。それぞれの家庭に馬が一頭いて、家のなかの、玄関の隣あたりに飼う場所があったそう。写真は戦前のも



こにいないかも分からね」と、小林さんは笑いながらおっしゃった。

一緒にお話を聞いていた羽野さんが「人間の生活のそばにいたから、同じ屋根の下で暮らしてたんですかね」とおっしゃる。すると奥さんが、確かに、という感じで「そうだねえ」とうなずいた。

自動車や機械の代わりに馬を用いていたとだけ聞くと、単なる道具のように使っていたという感じがしてしまった。けれど、馬のための場所が家のなかにあったり、馬が子どもの遊びにつきあったり。小林さんの「馬が待つて」という言葉や、それにまつわる思い出をお聞きすると、ペットとはちがう、職人が仕事道具を大切にあつかうような愛着や親しみがあるように思えた。馬も人もそれぞれに生活しながら、いつしよに作業をして、いつしよに時間を過ごしていたのだ。家族というより、仕事のパートナーみたいな関係だったのだろうか。

羽野さんの「人間の生活のそばにいた」という言葉は、馬と当時の人の関係にぴったりな気がした。



小林さんのお宅にあった「のぼつちよ」の写真。これは雨が降っても濡れにくいように藁を積んで、保存していたもの。藁は馬のえさなどにしていたそう。

のだけれど、馬がいる風景は50年前までであったのだ。想像もつかない昔のことだと思っていたけど、わたしの母が生まれていると考えると少し近く感じる。

小林さんのお家に馬がいたのは昭和37年（1962年）まで。牛もいたけれど、小林さんいわく牛は遅くていけないそう。だからなのか、中津森では馬を飼っている家のほうが多かったそう。そして、いい馬は戦争に連れていかれたのだという。

馬が手伝うのは農作業だけではない。たとえば山から薪や炭、材木など重いものを運んでくるときは馬の力を借りた。馬は木製のタ

イヤがついた荷車を引きながら、舗装のされていない道を歩いたそう。〔馬が車を引いて通ると〕いい音がするんですよ」と安田さんがおっしゃった。馬は自動車の代わりだったのだ。

「馬が待っていた」

小林さんも子どものころに家の手伝いで馬に乗ったそう。家に帰ると馬が待っていたのだという。〔手伝い〕やるのが嫌だから山に逃げてった。当時は子どもも大事な働き手で、男の子がいけない家でも女の子が馬に乗るなどして家のことを手伝ったそう。家のことばかりで、勉強なんてほとんどしてこなかったよ」と奥さんがこぼす。

小林さんが馬にそりを引かせて遊んだお話もしてくださった。馬が勝手に動いたりしないのか聞くと、〔紐でもつて動かせるから〕とのこと。手綱を持つような動きをつけて教えてくださる。なんて楽しそう。そう思ったところで、頭を蹴られそうになったとおっしゃった。頭に当たるすれすれのところまで馬の脚がきたと、手で馬の脚を表しながら話してくださる。「あのとき当たってたら今こ

ある建物の物語

都留市商家資料館

昔の調度品などを展示している都留市商家資料館。古写真に写る姿は、今とほとんど変わっていなかった。この建物は昔からずっと、何も変わらずに残ってきたものなのだろうか。

南條新（初等教育学科2年）＝文・写真



写真中央、モザイク模様の壁の建物が、のちに都留市商家資料館となる

都留市商家資料館は上谷の国道139号線沿いにある。まわりの家と比べるとおごそかな二階建ての建物だ。ここには昔の生活に使われていたものなどが置いてあると聞いていた。けれど実物を見たのは初めてだった。こういう家に住んでみたいと考えながらじろじろ見ていると、入口に入館無料の貼り紙が。館内へ入り挨拶をすると、現在館長をつとめる藤森利光さん（68）が挨拶を返してくださる。この建物の変化についてお話をうかがった。

建物の始まり

都留市商家資料館はもともと、町会議員だった仁科源太郎さんが絹問屋をするため大正10年に建てた家である。絹問屋というのは絹の仲介業だ。絹を作る店から絹を買い、絹問屋に注文してきた人のもとへ郵送する仕事である。今でいうところのネット通販に近い。

この建物からは絹問屋だったころの工夫を見ることができる。そのひとつが玄関だ。入ってすぐにある畳の間は、玄関の土間よりも一段高くなっている。この建物に入ってすぐに違和感をもったところだ。土間に立つと、自

分の太ももあたりに畳の間がある。これは絹問屋に絹を運んできた人が、荷物を降ろしやすくするための工夫だ。段差が高いおかげで、わざわざしゃがまずとも立ったまま荷物を降ろせる。むしろ荷物を置く感じ。絹を運んできた人に対して親切な設計だ。家の造りには今も絹問屋としての機能が残っている。

仁科家による絹の仲介業は昭和16年ごろに終わったとされている。それまで寄せられていた注文はがきが、昭和16年をさかいにぱったりと来なくなったことから、そう推測されている。ちょうど太平洋戦争の前あたりに、この建物は絹問屋ではなくなったようだ。

職場から貸家へ

絹問屋が終わってすぐに商家資料館になったわけではない。なんと下宿になっていたことがあったそう。昭和40年くらいのことで、2階の一部を貸していたという。このころ住んでいたのは、仁科源太郎さんの孫にあたる正信さんと、奥さんであるきぬえさん。そして養女と一緒に暮らしていたという。一大家族で住むには家が広いから貸していたのではないかと、藤森さんはおっしゃった。

下宿と言っても、今のように設備が整った部屋を借りるのとは違った。貸し出された空間にトイレや風呂はあったけれど、台所はなかったのではと藤森さん。下宿の人たちが住む建物はもともと絹問屋のために作られたものであって、台所や食堂は隣接する別の棟にあった。そちらにはきぬえさんが暮らしていたので、下宿の人は使わなかったのではないかとのことだ。夕食は、もうなくなってしまう都留食堂というお食事処へかよっていたのだとか。

下宿に使われていたという2階には、階段を上がった先にある廊下を挟み、6畳ほどの和室が3個ずつくらいある。今その部屋は展示室になっていて、昔を伝えるものが部屋ご



地図上の1cmはじっさいのおよそ120m

とにジャンル分けされて飾られている。

また昭和35年ごろには、この建物は鈴木法律事務所という会社に使われていたそう。事務所の子どもは1階にある仏間で勉強をしていたらしい。ただ、下宿が先か事務所に貸したのが先か、はつきりしない。それでも、この建物で下宿していたかたが大人になって挨拶しに来ていたり、近くの薬局の女性が事務所へ薬を届けていたり、この建物がどちらにも使われてきたことは確かだ。

私たちの知る商家資料館

平成5年1月18日、大正時代の雰囲気を残すこの建物は都留市商家資料館として、都留市有形文化遺産に登録された。一般公開されるようになった当時はもともとあったものしか展示されていなかったが、歳月とともに日用品などが集まり今のような資料館になってきた。今は、観光でお客さんが来たり、社会科見学で小学生が来たりしている。お話をうかがったときも、予定表には見学に来る小学校の名前が3、4校書かれていた。

下宿や事務所になっていたころから資料館になるまでのあいだ、この建物はどうだった



今の都留市商家資料館。2階の窓にはかつて手すりをはめられていたが、戦争中の金属回収でなくなった（2016.02.02）

のかうかがうと、閉めっぱなしだったのではとおっしゃる。資料館になる前の建物はボロボロで、雨漏りがひどくて、人が住める状況ではなかったらしい。今ある瓦屋根はすべて張り替えられたものだと話してくださった。

絹問屋として始まり、下宿や事務所に使われて今にいたる都留市商家資料館。古写真と見た目はほとんど変わらずとも、使われかたは変わっていた。建物自体でなく住む人、使う人が変化したからだ。いくつかの役割を果たして今にいたる、経験豊富な建物だ。



昭和初期



平成 27 年 (2015) 4 月 5 日

川茂発電所 04

川茂

富士山と桜を同時に望むことができる。ここで取水された水は古川渡、田野倉地区を経て、大月にある駒橋発電所へと送水される



昭和 10 年 (1935)



平成 27 年 (2015) 4 月 5 日

阿夫利神社 05

下谷

昭和 11 年 (1936) に樹幹が倒れたが、現在の桜は幹の一部から芽を出して成長した。植物学的にも珍しいことから、昭和 49 年 (1974) 4 月 11 日に市の天然記念物に指定された

お知らせ



第 7 回 城下町つるの雛まつり展

3月20日(日)～5月8日(日)
入館無料

あの頃の都留を歩く — 写真・記憶・物語 —

4月16日(日)～6月12日(日)
要入館料

※詳細は HP をご覧ください

■ ミュージアム都留

TEL 0554-45-8008

HP www.city.tsuru.yamanashi.jp (観光情報・伝統・文化)

未来へ 残す風景

寒さが少しゆるんで、暖かくなったことで、草木が芽吹きはじめてきました。そんな春らしい季節になってきましたので、今回は市内各所の桜の写真を紹介しました。

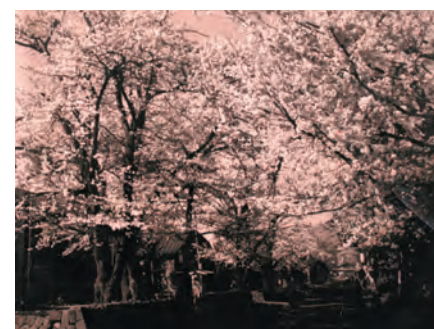
写真は、大正・昭和期に撮影されたもので、なかには伐採されて今は見ることのできない桜も写っています。伐採された桜が今も残されていたらどんな景色だったのでしょうか。今となってはこの写真から想像するほかありません。しかし、今、当たり前のように咲き続ける桜もやがては老木になり、朽ちて伐採された桜のように見ることはできなくなります。「散る桜 残る桜も 散る桜」という江戸時代の僧侶である良寛の句は、どんな桜であってもやがて散るという句意で、このことをよく表していると思います。こうしたことから、桜の写真は現在においても撮影して後世に伝えていく必要があるでしょう。桜の開花が待ち遠しいです。(森屋)

都留の桜の風景

ミュージアム都留では、平成 24 年度より都留文学大学地域交流研究センターと共同で古写真の収集をおこなっています。今回は市内各所の桜の写真をご紹介します。



平成 11 年 (1999 年) 4 月 9 日 谷村第一小学校の下校風景を撮影



大正 14 年 (1925)



平成 27 年 (2015) 4 月 5 日

東桂尋常 高等小学校玄関 01

桂町

現在の写真は国道 139 号線から撮影したもの。当時は道の両側に流れの速い川があり、春には桜並木が美しかったという。道路を拡張するさい川に蓋がされ、桜並木も伐採された



戦前



平成 27 年 (2015) 4 月 5 日

仲町大神社横 広場 02

下谷

かつては夜になるとポンボリの灯りが桜を照らしたそうだ。戦時中に桜は伐採され薪などに利用された。当時、広場は食糧増産のための畑となった



昭和 12 年 (1937)



平成 28 年 (2016) 1 月 22 日

院辺橋手前 03

下谷

かつては橋の両側に桜があったが現在は無い。昭和 34 年 (1959) に現在の橋が竣工され、そのころに伐採されたと思われる



アルバムをひらくと

アルバムのなかには、家族の写真や、友だちの写真、まちの風景の写真が残っている。私の知らない都留の姿が、まだ、誰かのアルバムのなかに残されているかもしれない。

都留に暮らす人のもつアルバムを、私にも、ひらかせてもらった。

藤本さんのアルバム

以前、古い写真をもとに八朔祭りでおこなわれていた仮装行列について、さまざまな人にお話をうかがったことがある。そのとき、一枚の写真がもつ、人の記憶を引き出す力に触れた。また、自分が知らなかった都留の姿を知るきっかけにもなった。写真は私にとって、都留を知るための方法になった。

古い写真やアルバムには、まだ私の知らない都留の姿があるはず。そんな思いから、古いアルバムをもっている人を探していたところ、都留市上谷にお住いの藤本守男さん（88）京子さん（85）ご夫妻にお話をうかがえることになった。

1月15日、藤本さんのお宅でアルバムを見せていただいた。2冊の分厚いアルバムには、たくさん写真が貼られていた。家族写真が多く、また冠婚葬祭にかかわる写真が多かった。古いものだと、守男さんのお祖父さんにあたるかたが参加したという譚（※）を映したのもあった。写真の裏や端に、写真館の名前が記されたものもある。当時はよく写真館で写真を撮ったそう。そのころの都留市

には3件ほど写真館があり、守男さんたちは今の三町商店街の近くにあった美映写真館、愛宕寫房でよく写真を撮ったそう。

なかでも私が興味をひかれた写真は、守男さんの妹さんの結婚式を映した写真だった。中央に晴れ着の男女が座っていて、その両脇に両家の親族が並んでいる。場所は守男さんのお宅の奥座敷だという。そこで、当時の結婚式の様子についてお聞きした。

藤本さんたちのご結婚は1954年のこと。結婚式を谷村町の下町裏通りにあった「魚國」という料理屋さんでおこない、披露宴は自宅でおこなったという。当時は、守男さんたちのように結婚式と披露宴の場所を料理屋さんと家で分けておこなう人か、いっぺんに同じ場所でおこなう人のどちらかだったそう。

結婚式を料理屋さんでおこなうときは、「魚國」や高尾町通りにあった「長月」といった、旅館も兼業するような大きな料理屋さんでおこなっていた。式のあいだ、お店の女中さんがいろいろと世話をしてくれたので助かったと京子さんはおっしゃる。

アルバムがあるということ

「昔はこういうアルバムももつとあったけど、引越したからね。あんまり残ってないよ」とおっしゃる守男さん。昔は都留市上谷にある喫茶店の「旅苑」の前くらいにお宅があったが、付近で起きた火災の貰い火にあり、引越しをすることになった。残していたアルバムのほとんどがそのときなくなってしまう、今残っている写真は残ったうちのほんの少しだそう。そのことをとても残念そうにおっしゃっていた。

写真一枚からわかるその当時のようす。同じころの写真が何枚もあれば、そのようすはより鮮明になっていく。私は、昔の写真が残っている、ということが、どれだけ幸運なことだろうと思う。人の生活のなかで、ふとした瞬間になくなっていてもおかしくないアルバムや写真たち。それを大切に残してくれる人たちがいるからこそ、私は昔の生活をよりはつきりと思い描き、知ることができるのだ。

金原由佳（社会学科3年）＝文
伊藤瑠依（社会学科3年）＝写真

披露宴には多くのお客さんがやってきて、3日くらいはずっと宴会が開かれていたのだという。近所の人や親せき、職場の人などが入れ代わり立ち代わりお祝いに来たそう。戦後の、ものがない時代。お酒を用意するのが大変だったと守男さんは感慨深げにおっしゃった。

また、お嫁さんの隣に座っている振り袖姿の女性は誰か尋ねると、京子さんが「そい嫁さん」だと教えてくださった。お嫁さんのお世話をする役目だそう。

辞書で調べてみたところ、嫁入りのさいに、嫁に付き添って行く女性のことをそう呼ぶようだ。ふつう、年下または同年齢の未婚の女性がつとめるということも書かれていた。ほかの地方では「つれよめ」「よめまぎらかし」とも呼ぶようだ。ある地方では「むこまぎらかし」といって、男性側に付添人がいることもあるそう。男性側の付添人はいたか尋ねると、このあたりではお嫁さんだけだね、と守男さん。写真の男性の左隣にいるのは仲人さんだそう。



守男さんの妹さんの結婚式の写真。1954年撮影



「ただいま」を 言いたくなるお店

ランチやデザートを食べる以外に、お客さんたちのコミュニケーションの場所にもなっている喫茶店「アルバム」。私はここで、31年間たったひとりで働いている女性に出会った。



古写真に 写るもの

古写真には、当時の人たちの目に映り心に刻まれたものが写っているのです。

これからもまちの景色や人々の暮らしは変わっていくでしょう。けれど写真に収めると、そのなかで変わることなく残り続けます。そしていつか昔を知るためのきっかけとなり、当時の人が見たものの感じたものを伝えてくれるでしょう。

写真は撮ったときの日常をそのまま切り取ることができます。また、文字と違って当時のようすが一目でわかります。

古写真が撮られた場所へ行つて、同じ構図で写真を撮り見比べたら、まちの変化に気がつきました。増えたものがあつたり、なくなつたものがあつたり、はたまた変わらないものがあつたり……。





佐藤さんがよくお話をされるカウンター。手作りのケーキは10種類以上もある



1月25日、私がこのお店を訪れたのは2回目だった。というのも、12月の始めごろ大学の授業の一環で、同じ学科の友人たちとお店をうかがっていたからである。店主の佐藤ゆかりさん（52）との出会いはそのときだ。ばつちりとした目が、笑うと三日月のような形になる佐藤さんは、同性の私でも見とれてしまうくらいすてきな笑顔の持ち主。初めてお店に訪れたとき、忙しい時間帯にきた私たちに「ゆつくりしていつてね」と声をかけてくれたり、初対面にもかかわらず快く取材に応じてくれたりした。喫茶店は接客業でもあるため、親切なのは当然のことかもしれない。けれど、初対面であることを感じさせない佐藤さんの雰囲気は惹かれ、どのような人柄なのかを知りたくなった。

お店のなかには

店内にはお菓子やケーキ、椅子のカバー、ランプシェードなど手作りの装飾や雑貨がたくさん置かれている。それらは赤やピンクなどの暖色が多く、温もりが感じられ、先日降った雪による寒さもやわらいでしまう。入口から入って左奥には、お客さんから売ってほし

いと依頼されて置いているハンドメイド雑貨がある。複数のお客さんから依頼されているため、1ヶ月前と比べて商品は新しくなっていた。まるでお客さんとひとつのお店を作っているようだ。

佐藤さんの朝は8時半にお店に来て、仕込みをすることから始まる。9時ごろには買い出しに行き、10時から開店。佐藤さんは都留で生まれ育ち、幼いころからずっと喫茶店を開くことが夢だったそうだ。そのため、高校を卒業してからは東京の調理師専門学校に通っていた。ほかにやりたいことはできなかったのか尋ねてみると、「ほかにできることが無かったから」とひかえめなようすで笑っていた。しかし、これというひとつの道を決めて今に至っていることを知ると、とても芯の強い女性なのかもしれないと思った。

佐藤さんとお客さん

大人から子どもまで、お店を訪れるお客さんの幅は広い。女性客が目立つこのお店で、初めて来たときに見た、お店のお手伝いのようなことをしていた男性のことが気になり、佐藤さんに話をうかがってみる。すると、ぼ

る。「カウンターに座るお客さんはお話する機会が多いから。身内みたいだね。ひとりでいらつしやるかたには、『この人はなにさんですよ』って紹介してお互い仲良くなってもらつて」。

壁には、昔このお店に通っていたお客さんからもらった写真や、作ってくれたコルクボードがかけられている。それらのほとんどは学生からのもの。というのも、お店を始めたころは今よりも賑わっていて、本学の学生のアルバイトを雇っていたこともあり、客層は学生ばかりだった。また、下宿が近くにあったため、毎日通う人もいた。「なんかおかえりつてね」。

お話を聞きながら、オープン当初から変わらないうというテーブルや椅子を見つめる。角は丸みを帯びていて、使われている年月を想起させる。ここに何人の先輩が座ったんだろう。ふと、顔も見たことの無い先輩を意識してしまう。佐藤さんは多くのお客さんの成長を見守っているのだろう。

佐藤さんがお客さんに言われて嬉しかったことはたくさんあるそう。「文大の卒業生が何回かお店に来てくれたときに、お店まだ



お客さんが作ったハンドメイド雑貨

んやりとしていて覚えてはいないようす。30代くらいの……と年齢を言ってみると「あつ冷蔵庫!」と思い出した佐藤さんに思わず笑ってしまう。冷蔵庫の調子が悪くなり、常連さんに見てもらったそうだ。よくよく聞いてみると、そのお客さんは小学生のときから親子でずっと通ってくれているという。佐藤さんはこのお客さんの結婚式にも呼ばれていて、その身内のような繋がり of 濃さに驚く。

「男性のかたとか、入って来てくれてありがとうつてなります。でも、1回来てくれるとその後また来てくれるから嬉しい」とりピーターが多いことを佐藤さんは感謝してい

続けてくださいいねって言われたときはわたし歳なんだなつて」。



「お店っていうより、おうちに帰って来たみたいですよ。すぐアットホームな感じがするので、ずっといたくなつちやいます」と私がお店の印象を伝えると、佐藤さんはまた目を三日月にして「ありがとうございます」と笑う。

大学生になってから私は地元に限らず、都留を含めさまざまなお店に足を運ぶようになった。地元から遠く離れた土地で、こんなにも「ただいま」を言いたくなるお店は初めてだ。

「作りたいものを作っていたいんですよ。ほんとにちっちゃいお菓子でもケーキでも」と佐藤さんはおっしゃる。なにを作るときも毎回テーマを決めてから作り始めるそう。自由な発想で自由に作っていく。毎日が充実していてとても楽しそうだ。後悔をしない、そんな姿が佐藤さんからはうかがえた。

山内利奈（社会学科1年）Ⅱ文・写真
加藤明香（初等教育学科3年）Ⅱ写真

左官職人の手仕事

—壁は、怖さと面白さの間で作られる—

今から12年前、古いアパートを自分の手で改装しようがんばる本学の学生たちがいた。その当時の学生のブログを読んでいると現れたのは、「アンチ」と呼ばれる当時19歳の青年。彼は19歳という若さにもかかわらず、学生たちに壁の塗り方を教えていたのだ。そのことに驚いてさらに調べてみると、現在は伝統工法で壁塗りをする左官職人として活躍されていると知った。本名は藤本敦さん。当時19歳だったアンチこと藤本さんは、現在31歳になっていた。

昔ながらの壁塗り

初め左官職人と言われてもぴんとこなかったが、茶室にある土壁や蔵にある漆喰壁を作る職人さんだと知ってイメージが湧いた。かつては「家は大工と左官がいれば建つ」と言われたほどで、左官が壁の土台から作っていた時代もあったという。けれど今は、貼るだけで済む建築用の資材が壁に使われ、左官の仕事は減ってしまった。今残っている職人さんも、多くは時代のニーズに対応し、安くて

均一な仕上がりが保証される既製品の材料を使っている。そんな時代に逆行するような壁塗りをするのが、藤本さんだ。

藤本さんは天然素材の材料だけを使って、土壁や漆喰壁を作る。土壁ならば使われるのは、なんと土と藁と砂だけ。これに水を足して練ることで、壁に塗り付ける材料ができあがる。「数値があつてそれ通りに作るわけじゃないから」と藤本さんはおっしゃる。目の大きな藁を入れるか、ふるいにかけて細かなものを使うかで壁の質感はちが

うし、気温の高さで水の引き具合も変わるので、現場の気温に合わせて水の量も調整しなければならない。

「あとひとつかみ、藁を入れるか入れないか、この材料になに足せばいいとか、全部感覚。それが楽しくもあり、難しくもある」

料理で一味足りないときにこれを足してみようというのに似ている。こうすれば絶対によくなるというマニュアルはなく、ものの状態をよく見て、経験や感覚をもとに調整するのだ。

手間のかかる伝統工法にこだわるのは、藤本さん自身がそのよさを知っているからだ。藤本さんは伝統工法でできた壁を「天然の空気清浄機」だとおっしゃる。自然の素材はカビを防いだり、湿気やにおいをよく吸ったりするので、建築用の資材を使った住宅に比べ、空気がすがすがしいそう。また、すべてが手作りなので質感や色、ひとつとして同じものはない。均一に作られた資材を使った壁とはまったくちがうのだ。藤本さんがおっしゃる。「自然のものでできてるから、自然を見たときみたいな感動がある。景色とかずっと見ても飽きる人っていない。けど、既製品

の壁は10分も見えてらんない。（伝統工法の壁には）なにか感じるものがある」。

仕事がない

こういった材料の配合や塗りの感覚は最低5年の修行を積まなければわからないという。藤本さんもまた修行をしていた。

高校卒業後、一度は一般職に就いた藤本さん。けれど自分に合わないと感じ、ご実家の左官仕事を手伝うようになったという。仕事を手伝ううちに藤本さんは、塗ることが楽しいという気持ちと、この道ならうまくできるのではないかという思いが出てきた。「でもちゃんとした根拠がないから、覚えにいきなかった」と藤本さんは言う。

修行をお願いする手紙を書き、辿り着いたのは三重県の親方のもと。すぐに仕事を手伝わされ、ほとんど見よう見まねで仕事を覚えていったそう。20歳前半の若くて楽しい時期にもかかわらず、朝早くから遅くまで働き続ける毎日。くたくたで帰った後でも、つぎの日の現場で先輩たちが使う材料の仕込みをし、それから塗りの練習までしていたという。辞めたいとは思わなかったのかうかがうと

「昔から負けず嫌いというか。覚えに行ってるから、覚えてない段階で帰っても行つた意味がない。今帰ってもなにもないから」。昔からプライドは高いんだよねと笑いながらおっしゃる姿は、無邪気な少年のようにも芯の強い親方のようにも見えた。

修行を終えて都留市に戻ってきた藤本さん。しかしそこには修行以上の苦労があつた。伝統工法の仕事がつたくなかつたのだ。当時山梨県では、伝統工法での壁塗りの文化が根付いておらず、建築の専門である工務店や設計士の人にさえ知られていないほどだったという。

「しんどい思いして覚えたものが使つてこないって。ふつうの左官屋が嫌でいったのに、またふつうの仕事しなきゃいけない」

藤本さんは伝統工法を取り入れてもらえるような工夫を考えた。土壁という想像しがちなのは昔ながらの日本建築で、自分の家には縁のないことのように思えてしまう。そこで、石膏ボードと呼ばれる通常の建築用の資材の上に、薄く土を塗り重ねることで、現代の住宅にも取り入れられる形にした。これだけでなく空気清浄機のような効果は感じられる

そうだ。さらに、年代や場所によって色のちがいがあある土をうまく配合することで、藤本さんは色を自由に作りだす。そのため古びたというよりも、むしろ現代の住宅にも合う落ち着いた色の壁を作りだしていた。ただ、より安く早くの真逆をいくような藤本さんの仕事では、その価値を理解してもらう必要がある。あまり話をするのが好きではないと言う藤本さんだが、伝統工法のよさを伝えるために説明会などを開催した。そうしているうちに、協力してくれる設計士や工務店のかた、価値を理解してくれるお客さんにも出会うことができたのだ。

塗りの怖さ

藤本さんの仕事をもって、自宅の壁塗りを依頼したというお客さんのお宅におじやました。玄関を入ってすぐに目に飛び込んできたのは、橙色に輝く壁。ガラスやプラスチックがびかつと光るハイライトのような輝きではなく、布のようなやわらかさのなか、全体につやのある輝きを含んでいる。こんな光沢をもつ壁を見るのは初めてで、

説明されるまで手作業で塗られた壁だとは思いましなかった。

これは壁塗りのなかでもっとも難しいとされる、「大津磨き」という手法で塗られた土壁だ。塗るというよりも材料をならしていくというもので、何度も壁に圧力をかけるようにこてを滑らせ光沢をだす。ていねいに繰り返し作業が進められるので、1m四方くらいの壁を塗るにも1日がかりなのだという。

集中しておこなわれる壁塗りなので、このお宅で施工した日には現場に人が入らないようお願いした。けれど人に入ってもらわずに作業できるチャンスはこの1日だけ。なんとしてもこの日に成功しなければやり直すことはできない。失敗は許されないのだ。そのため前々から自宅で材料の試作を繰り返し、何度も練習をしてから本番に臨んだ。それでも当日の気温や環境はちがうので、成功する保証はなかったが、藤本さんは見事な壁に仕上げた。

大津磨きをする前日は眠れないと藤本さんはおっしゃる。通常の壁にすることもできるのに、お金をかけてでもやつてほしい

藤本さんの手仕事

現場で混ぜ合わせた漆喰の材料を大きなおたまでひよいとすくいあげ、左手に持つ杉の板に乗せる。そこから左手のスナップを利かせつつ、右手にもつこてに材料に乗せると、すぐさま壁をなでた。下地で白かった壁には、みるみるうちにクリーム色の漆喰が広がり、なめらかに滑る藤本さんのこてからは曲線の模様が表れた。慎重にかつ素早く。その間、藤本さんの目線がめまぐるしく変わるのは、まわりとのバランスを見ているからだろうか。たまに後ろに下がってようすをうかがっては、またすぐに元の位置へ戻る、を繰り返していた。

ていねいさが必要でも時間をかけてばかりはいられないのが左官の仕事。材料を練っているときから固まりだしたり、水を吸いだしたりするので、時間を吟味する必要があるのだ。「今しかないっていうタイミングは何回も訪れるから」と言っていた藤本さんの言葉を思いだす。藤本さんの集中力とその一瞬にかける思いをひしひしと感じて、話しかけることなどはもつてのほか、音を立てることさ



大津磨きが施された壁。家主のかたは決して触らず大切に扱っている

と依頼するお客さんからの期待や、できあがりを楽しみに待つ思いを痛切に感じるのだろう。藤本さんの手仕事は、藤本さんにしかできない。それがやりがいである反面、プレッシャーや緊張、恐怖、そういったものが付きものなのだ。

えもできなかつた。

現場から帰る車なかで藤本さんが教えてくれた。家を建てる人にとって壁は一生のものだと。住む人にとっては、その家で暮らす限りずっとその壁とともに過ごすのだ。藤本さんが引く一本の線、最後のひと塗り、付け足した曲線。もしこのひと塗りがなければ壁のこの筋はないと思うと、藤本さんが一度腕を動かすことに怖ささえ感じた。たった一瞬のことが、それから何十年ずつと壁に残り続けるのだ。

話すことが好きじゃないという藤本さん。そのぶん壁と向き合う気持ちは人一倍だ。藤本さんの口から壁のよさを語られることは少なくとも、仕事ぶりやできあがった壁を見れば感動や魅力を感じる事ができる。けれど藤本さんの仕事は、感動や魅力を作りだせる面白さをもついつぼうで、作ったものが自分の手を離れいつまでも残ってゆくことへの怖さもある。そういう面白さと怖さの間を歩き来しながら作られるからこそ、藤本さんにしか作れない特別で繊細な壁に仕上がるのだ。



左・右下：藤本さんが手がけた民家の土壁。右写真は土壁を近くで撮影したもので藁や砂のようすがよくわかる
右上：鍛冶屋さんが作ったこて。親指と同じくらい小さなものから手のひら以上の大きなものまで300本以上を使いわける
背景：見せていただいた住宅の壁。「引き摺り」と呼ばれる横に流れるような線の模様が付く漆喰の壁

橋のない川を渡る

1月17日午前8時、肌を刺すような寒さのなか、おなじま食品館で賀川^{かがわ}一枝^{かずえ}さん（54）を待っていた。しばらくすると、大きなワゴン車を運転する賀川さんがいらつしやつて、窓越しににこやかに会釈をしてくださった。私が車へ乗り込むと、賀川さんは「寒かったですよね」と暖房の風量を強めてから、朝日^{あさひ}曾^そ雌^めにあるご自宅へ車を走らせた。

都留第二トンネルを大月方面へ抜けて、都留バイパスを途中で左へ曲がり、わき道を進むこと20分。デコボコ道の山のなかを進んでいると、目の前に川が現れた。水量は少なく、流れも穏やかだ。賀川さんのご自宅へ向かうにはこの川を車で渡らなければならない。天気予報を確認して、増水しそうなきは前日に車を川の向こうへ渡らせておいて、ご自身は別ルートを歩いて町へ出るという。

車が川を通過している写真を撮りたいと言うと、「じゃあ、いったんまわってきますので待っていてください」と、車で川を渡り、



賀川さんのご自宅へ

「橋のない川」から少し山道を進むと、大きなログハウスが見えてくる。ここが賀川さんのご自宅だ。山のなかにひっそりとたたずんでいて、まわりに民家はほかに一軒しかない。

Uターンしてきて写真が撮りやすいようにしてください。今度はご自宅へ向かうべく私も車に乗って川を渡る。賀川さんは慣れたようすでゆつくりと車を進めるけれど、私は初めての体験だったので、緊張と不安で、こぶしをかたく握って前のめりになってしまった。

都留という居場所

かがわかずえ
賀川一枝さん



賀川さんが飼っている3匹の犬（賀川一枝さん＝写真提供）

賀川さんを知ったきっかけは、友人に「ぜひ取材してほしい人がいる」と紹介してもらったことだった。11年前に東京から都留へ移住してきた賀川さん。なぜ都留で暮らそうと思ったのか、今の暮らしはどのようなのかお話をうかがった。

今村遥香（社会学科2年）＝文・写真

都留へ来たわけ

賀川さんは、都留に移住してくる前、東京都世田谷区にあるご主人のデザイン事務所でコピーライターや雑誌編集のお仕事をされていた。都留のログハウスは、19年前からご主人と2人で週末に通ってつくり、8年前に大工さんが入って完成した。おとしにご主人を亡くしてから、このおうちで賀川さんのお父さんと犬3匹と暮らしている。

賀川さんが生活の拠点を都留へ移したのは、11年前の2005年。都留へ引っ越してきたのは飼犬のためだったと話す。当時住

ここで暮らし続けたい

賀川さんは、東京で暮らしているときに、食べ物もエネルギーを手に入れるのも、すべてお金で解決しなければならぬと感じていた。それは便利なかもしれないけれど、都留へ来て「そうじゃない世界」があることに気づいたそう。たとえば、東京で家を留守にするときに、ペットはお金を払って専門の人や場所に預けなければならぬが、都留では少しのあいだ預かってくれる人がいる。「木を切ったから薪を持ってきたよ」と声をかけてくれる人がいる。そういったさりげない心

遣いや、自分が地域に受け入れられているという喜びや安心を都留では感じられるという。それらは東京に約40年暮らしているなかでは得られなかったものだ。なにかお互いにお金の利益がなくても人とつながっていられるのが都留のよさだと話してくださった。

「私は引越してきたとき以上に、ここで暮らし続けたいってすごい思っ。それはこの自然だけではなくて、都留の人たちと



しっぽをピンと立て、山へ出かけていくローラ

関わることで、ここに住んでいたいと思っただんですね。都留はなんでもある都会と比べて、生活するのに不便だと感じる人が多いかもしれない。けれど、すべてお金で解決できない環境だからこそ、人と人が助け合っているところだと思っ。今回、賀川さんにお話を聞いて、都留の暮らしのなかには思いやりの気持ちで結びついた関係があると気がついた。



上：ログハウス専門誌の編集の仕事をしていた友人にアドバイスをもらいながら建てた。まだガラスがはめられていないときは、家のなかでキャンプのようにして夜を明かすこともあったそう

右：薪ストーブが室内を暖める。家の周りにはストーブ用の薪がたくさん置かれていた



んでいたところは道がコンクリートで舗装されていて、犬を散歩させるには地面がかたくてかわいそうだと思っていた。そこで、週末や休みのときに飼い犬と遊びにこられるところとして、自然があり犬を放し飼いすることもできる今の場所に家を建てた。「犬たちは、いつもつながれていると自由になりたいと思うだろうけど、いつも自由だからたまにリードをつけるとすごくうれしいみたい。つながれているうみみたいな感じ」と床にお座りをしている飼い犬を見ながらおつしやる賀川さん。そのときのまなざしは、我が子を見ているように、やわらかく、やさしいものだった。

気持ちの変化

こつちへ来た当初のことを「いい場所があったなという感じで、よそからきてこの自然や環境をただ利用させてもらうっていう意識しなかったんですよ」と振り返る。

その意識が変わったのは、3年前に山梨県で国民文化祭が開催されたときのこと。水の

女の子だって遊ぶのよ



遊びの思い出をお聞きする連載の三回目。今回は当時女の子だったかたに、どんな遊びをしていたか教えてもらった。さあ、どんな思い出話を聞かせていただけるだろう。

1月24日、小形山のご自宅で井上明子さん（88）にお話をうかがった。井上さんは、肌も白髪もとてもきれい。すべすべできめ細かい。笑うときは顔全体で笑う感じで、にかつていうよりもぱあーつていう感じの笑いかただ。

井上さんが話してくださいったのは、小学生になつたくらいのころのお話だ。だから6、7歳くらいの記憶。井上さんが指を折つて遊びの名前を挙げていく。おてだま、きしやご、ゴムつとび。それから……。出

きしやごは遊びの優秀選手

次に聞いたのはきしやご。じつはこれ、おはじきのことだ。井上さんにもきしやごという名前の由来は分からないそう。

おはじきだつてはじくだけではない。もつといろんな遊びができる昔遊びの優秀選手だ。先ほどのおてだまと同じように手の甲に乗せる遊び。おてだまでするときもそうなのだが、これは指のつけ根のあたりにぐつと力を込めてなるべく手をそらせるのがコツ。

もう1つ、雨戸返しを使った遊びもある。雨戸返しというのは雨戸の下についているレールのこと。この遊びは説明がしにくいよね、と井上さんはおはじきの代わりにおてだまを使い、じつさに目の前で動かしながら教えてくださった。

数人で順番に雨戸返しの側面におはじきを投げ当てる、跳ね返していく遊びだ。前の子たちが跳



てきたのは男性に聞いたときはちがつた遊びの数々だった。

おてだまの思い出

おてだまをすることは多かったわね、と井上さん。おてだまはいくつでやつてましたか？と聞くと、なんと4つでやつていたそう。おてだまでするときは思ひ浮かべるのは、数個を投げれば受け止めるというやりかただろう。でも、井上さんがするおてだまは、それだけではなかった。



ゴムつとびのゴムの結びかたを見せてくださった

手始めにという感じで井上さんは片手で3つを投げて見せてくれた。大道芸のジャグリングみたい。ほかにも、両手で3つほど持ち、1つを高く投げて、そのあいだに残りの2つを高速で手と手のあいだを移動させるというやりかたもある。高く上げたのが落ちてきたらキャッチするというのを繰り返して遊ぶのだ。それ以外にも、片手に持てるだけおてだまを持ち、それを一気に投げ上げているあいだに手をくるつとひっくり返して、甲ですくうように受け止める、という遊びかたが。これが難しいのだ。私も井上さんが出してくださいったおてだまを2つ使つて挑戦したが、甲ではいてしまつて1つも乗らなかった。思わずあーつと声が出る。それを隣で見ていた井上さんは机に突っ伏し、声を上げて大笑いしていた。井上さんは歌いながらおてだまをする。「おひとつ おとして おさらい」。子どものころも、こう歌いながらおてだまをしていたのだそう。それでも、最近では手が思うように動けなくてと悔しそうに顔をゆがめてみせた。

思い出話は手品を披露するように

男の子と女の子は一緒に遊んでいましたか？と聞いてみると、混ざつて遊ぶつていうのはなかったと井上さん。だから同じくらの年代のかたにお話を聞いても女の子と男の子で登場する遊びはちがうのか、と納得。

井上さんのお話を聞いていると当時の遊びかたが目には浮かぶように想像できる。それは話す内容がとても具体的だからだと気づいた。ゴムつとびのゴムの高さや、おてだまうたことなど、遊びの思い出が情景としてそのまま頭のなかに入つて、いるのではないかと思うほど。そして、まるで手品の旗が1枚出るとする続ける出てくるように、思い出は1つをきつかけに次から次へと連なつて出てくるものなのかもしれない。

きつとからだに染みつくほど毎日のように遊んだり歌つたりしていたからこそ、その思い出はいつ聞かれても披露できる準備が整っているのだ。

つるのひとこま

『フィールド・ノート』では、地域みなさんと一緒にページをつくりたい
 と思い、みなさんから日常のひとこまを切り取った写真を募集しています。
 今号、さっそく市民のかたからすてきな写真が届きました。

都留市民のかたがた=写真
 『フィールド・ノート』編集部=文



永生(2015年11月7日)
 撮影者: 吉澤 政次 さん
 お母さんたちのお昼ごはん作り。
 いいにおいばれてまう

永生(2015年11月9日)
 撮影者: 板津 松男 さん
 落語で大笑い。うへん、うへん笑顔!



自宅のお庭(2015年11月25日)
 撮影者: 渡辺 稔 さん
 庭に咲いた皇帝ダリアの花。
 都留で咲くのは珍しいんですよ



募集要項

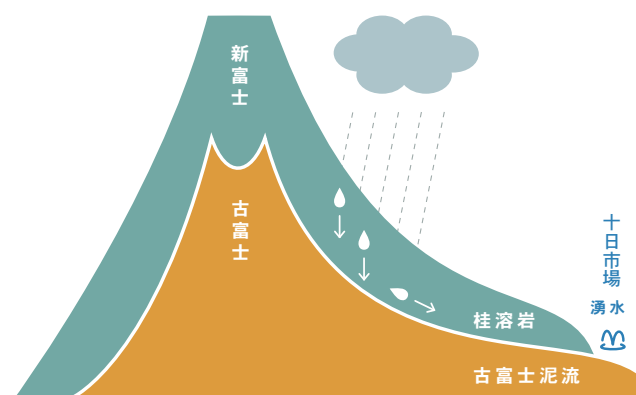
- ・撮影した日、撮影スポット ・お名前(匿名希望の方はペンネームでも可)
- ・写真についてひとこと ・年齢(年代だけでも可)

写真はこちらまで

【メール】 field-1@tsuru.ac.jp

【住所】 〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1 都留文科大学 地域交流研究センター
 フィールド・ミュージアム部門 『フィールド・ノート』編集部

富士山と湧水概念図



市内を対象に研究活動をする本学の先生が
 たの目に、都留市はどのようなように映るの
 でしょう。連載第1回から3回では、湧水を
 研究する内山美恵子先生にお話をうかがい
 ます。今回は富士山の湧水が私たちの手元
 まで届くしくみを教えていただきました。

道ばたの用水路の水、蛇口をひねれば出て
 くる水。私たちがふだん使う都留市の水に
 は、富士山から流れてきた湧水を含むもの
 がある。湧水は大きく分けては地下水の一部
 であり、地中をゆっくりと流れることでろ過
 され、きれいな水になると言われている。
 現在、十日市場・夏狩地区を流れる湧水は、
 約10万年前以降に起こった富士山の噴火で
 きた地層のなかを流れている。
 はじめに火山活動が起こったのは古富士火
 山で、今私たちが目にする富士山の前身とな
 る山だ。この噴火で市内に流れ出た噴出物を
 古富士泥流と呼んでいる。これは、山体をつ
 くっていた岩石や火山灰などが崩れ落ちて谷
 を流れ下り、粘土質になって固まったものだ。
 そのためこの古富士泥流は、とても固くて水
 を通しにくい。
 その後起こった噴火は新富士火山による
 もので、このとき桂溶岩が流れてきた。これ



内山美恵子先生(49)
 COC推進機構特任教授
 水理地質学専門。2010年から
 都留での調査を始める。

伊藤瑠依(社会学科3年) 文

は高熱のマグマが地表に出たことで、冷や
 れ固まったものだ。亀裂ができていたため、
 水が染み込みやすくなっている。
 富士山に降り注いだ雨や雪は、まず水を
 通しやすい桂溶岩のなかに染み込まれる。
 垂直方向に染み込んでゆくのでじきに古富
 士泥流に到達するが、この地層は水を通し
 にくいいため染み込むことができない。その
 ため桂溶岩と古富士泥流の境目を下流へ流
 れてゆくのだ。桂溶岩の末端までたどりつ
 くと地下水は行きどころをなくし、湧水と
 して噴出していった。
 何万年も昔の噴火による溶岩の流れが、
 たまたま十日市場・夏狩地区で留まった。
 こうした自然の偶然が重なったからこそ、
 今私たちは富士山の湧水という恩恵を受け
 ているのだ。
 次回は富士山の湧水の水質や湧水を利用した
 取り組みをお伝えします。

連載

研究者が語る都留の魅力 第2回

富士山から湧水が届くまち 2

ムササビ 観察日記

— 3 年目 —

2013 年、ムササビライブカメラを 2 つの巣箱に取り付けました。本学ホームページ (<http://www.tsuru.ac.jp>) では『ムササビ観察日記』のブログを更新しており、ムササビのようすをご覧いただけます。みなさんも一緒にムササビのようすを見守っていきましょう。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真

1 月のムササビのようす

1 月 3 日 尻尾の掛け布団



お昼過ぎ、尻尾を布団にして寝ている可愛い姿が観られました。

1 月 4 日 丸まりかた



ムササビはどのように丸まって寝ているかわかる寝かたをしていました。

1 月 7 日 壁はおいしい？



しきりに壁をなめる姿を確認しました。ふだんは観られない光景です。

1 月 25 日 外をずっと眺める日



この日は外のようすを 10 分以上見ていました。外のようすが気になるのでしょうか。

1 月のようすを観ていると、本学美術棟横の巣箱に来るムササビの出巣時刻は 19 時前後と一定ですが、帰巣時刻が日によって違うことがわかりました。また、ライブカメラのようすから 1 月のあいだ巣箱に来ていた個体は同じである可能性が高いです。

2015 年

12 月 5 日 ムササビ観察会をおこないました

ムササビの観察会を開催しました。今回はそれほど冷え込まず、観察に集中することができました。16 時半ごろ今宮神社に着き、観察前にムササビのフンを探します。出巣時刻は例年と変わらず 17 時ごろでした。

そして、今回はなんと 5 頭のムササビを観ることができました。全員が滑空のようすを観ることができ、とても満足な観察会となったと思います。



1.

ウメの花

2016 年 1 月 15 日 都留市田原
暖冬の影響か、本学キャンパスのウメが二分咲になっていました。例年、このウメの開花は 1 月下旬から 2 月です。

2.

シモバシラの氷柱

2016 年 1 月 14 日 都留市田原
シモバシラは冬になると根元に氷柱ができます。今季は 1 月に入ってから氷柱が確認されました。

こよみ
暦



3.

タヌキ

2015 年 12 月 18 日

撮影場所では毎年タヌキの「ため糞」が観察されます。春には糞に含まれた種子が発芽したところを見ることができます。

4.

アナグマ

2015 年 11 月 13 日

アナグマは地域によって冬眠するものもありますが、本学周辺では活動を続けているようです。次月以降の記録も気になります。

5.

ニホンジカ

2015 年 11 月 14 日

オスが撮影されました。林内を歩くと、真新しい糞を見かけることが多く、身近に気配を感じる動物です。

FIELD・NOTE News (2016.01~02)

『フィールド・ノート』編集部がこの冬の活動をお伝えします。
『フィールド・ノート』編集部=文・写真



雪が降りました

1月17日の23時ごろから水分を多く含んだ雪が降り始め、翌朝8時ごろには本学周辺で約40cmの積雪がありました。中央道では全線通行止め、JR大月駅から高尾駅で運転見合わせとのことで市内の学校は休校。18日は快晴だったため、雪遊びをする学生が見られました。

2014年は2月8日から9日、14日から15日にかけて記録的な大雪となりました。バスや鉄道は9割以上が運休し、スーパーやコンビニの営業はなんとか続いたものの、商品の入荷が大幅に遅れました。今年はそういった積雪はありませんでしたが、雪が解けて凍結し、歩行に注意が必要でした。(山内利奈)



左(2016.01.18) 右(2014.02.16)

きらめき女性塾

きらめき女性塾という都留の活性化を考える市民団体のかたがたと『フィールド・ノート』編集部が交流する機会がありました。今回はわたしたち編集部のうち4人が、自分が思う都留の魅力や、『フィールド・ノート』について感じていることを発表しました。市民のかたと学生では、都留市の見かたも魅力の感じかたも違っていて、市民のかたのお話に聞き入ってしまいました。また、ここを取材してほしい、この場所に『フィールド・ノート』を置いてほしいというような率直な意見を聞くことが出来るととても嬉しい時間になりました。(長尾泉)



意見が積極的に飛び交いました
(2016.01.26)

駅の展示替え

都留文科大学前駅の改札横にある展示を替えました。前号の特集である「木」の記事を中心に、編集部員が選んだお勧めの記事が飾ってあります。また、本学図書館横ビオトープでの活動について書かれたビオトープ通信も展示しています。駅の展示は、編集部員が定期的に貼り替えています。大学まで電車で来られたかたにとって、この展示が『フィールド・ノート』編集部との最初の接点になるかもしれません。ですので、駅の展示が充実したものになるよう、これからも心を込めて展示に励んでいきます。(南條新)



新たに8枚の展示物を貼りました
(2016.02.04)



都留にいた 組子職人

佐藤重雄さんが作られた菊花文様の透かし彫り。佐藤さんと親交の深かった遠藤静江さんのお宅に保存してある

前号の記事「都留にいた組子職人」(87号参照)に関して読者のかたから数点のご指摘をいただきました。そこで今回は、組子細工と佐藤重雄さんの記事を補足させていただきます。

前号では組子職人の佐藤重雄さんを取り上げました。記事のなかで、佐藤さんが組子の名人であったことを中心に書きましたが、佐藤さんは組子以上に透かし彫りを得意としていました。『職人衆音ばなし』には「『組子という飾り障子や欄間の透かし彫りでは東京一の名人』なんて書かれましたが」と佐藤さんが恐縮しながら語っている場面が描かれています。

透かし彫りについては、前号でもお世話になった稀代木芸さんに再度お話をお聞きしました。透かし彫りは組子とは違った技術です。組子が部品を組み合わせることで文様を作りだすのに対して、透かし彫りは文様を彫り出す技法です。木の板に図案を描いて糸のこぎりなどで彫りだします。さまざまな手仕事を写真とともにまとめた『明治を伝えた手』では、「生地をそのまま見せるので刃物だけで

仕上げる」とも書かれています。透かし彫りの作品は高級なものとして扱われていて、昔は地位や階級の高い人々が所有していたようです。組子は庶民が好み、透かし彫りは上流階級が好んでいたといえます。

最後に、前号39ページに載せました佐藤さんの作品「菊文様の風炉先屏風」を「風呂敷屏風」と誤って表記してしまいましたことをお詫びします。

ご指摘をいただき大変ありがたく思います。組子細工や透かし彫りについて、さらに深く向き合うことができました。

以前から読んでくださっているかたにも引き続き読んでいただけるよう、誌面作りに努めたいと思います。何かお気づきの点がありましたら、気兼ねなくご意見いただきたいです。これからもどうぞよろしくお願いします。

高橋未瑠来(社会学科2年) 文・写真

【参考文献】

『職人衆音ばなし』
齋藤隆介著 文藝春秋社 1967年
『明治を伝えた手』
杉村恒著 朝日新聞社 1969年



2016年5月 発行予定

「うら山博物館」 (仮)

FIELD NOTE

no. 88 Mar.

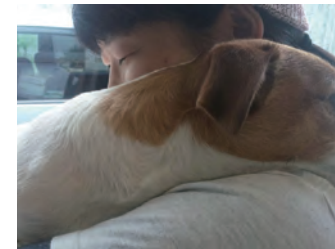
発行人
北垣憲仁
統括編集者
西教生 (42)
編集長
伊藤瑠依 (22-23,30-33,40)
舟田早帆 (4-5,6-9,18-19)
副編集長
長尾泉 (7,38-39,41)
南條新 (2-3,7,20-21)
編集
廣瀬はづ紀
別符沙都樹
黒澤瑞保 (12)
加藤萌香 (6,43)
金原由佳 (8,24-25,46-47)
今村遥香 (8,34-37)
小俣溪和 (1,6,14-15,48)
高橋未瑠来 (9,16-17,42,44)
菊池香帆 (13)
窪田りさ (11)
福元明梨 (10)
山内利奈 (9,27-29,45)
ロゴデザイン
工藤真純
[] は編集担当ページ

FIELD-NOTE (フィールド・ノート) 88 号
発行日：2016 年 3 月 24 日
発行部数：500 部
発行・編集：
〒402-8555
山梨県都留市田原 3-8-1
都留文科大学
地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門
『フィールド・ノート』編集部
E-mail：field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

編集後記

思い出の1枚



2015.6.26 都留市 谷村町

かん板犬のラフちゃんです。三町商店街にある「深澤食品店」にいます。人なつっこくて近づくと「なでてなでてー」と言わんばかりに体をすり寄せてきます。この日は、商品が入った箱の上に座っていたラフちゃんがわたしの肩に頭をのせてきてくれました。短めの毛が顔に当たってくすぐったかったのと、肩に乗った頭が重くて温かかったのをよく覚えています。（長尾泉）



2014.5.18 都留市 田原

メ線は足元。歩いているといつの間にか側溝を目で追っています。これは私のアパートの横を流れる側溝です。はじめての記事で取り上げました。今でも側溝を見るのが好きで、水の量や透明度、何が流れているのかなど、つつい確認してしまいます。都留に来て間もない私が気になっていたのは足元の世界だったようです。（南條新）



2015.1.9 都留市 田原

ライス追加で、とマスターに伝えてから、カレーラーメンをすすったのも懐かしい思い出です。2014 年の 5 月に閉店するまで、じつは私は「ラーメン福多」をよく利用していました。お店のあった場所は、いまはアパートになっています。一度変わってしまった風景から過去をしのぶのは簡単ではありません。移り変わる町の風景を記録する道具としても、カメラはとても重要です。（西教生）

FIELD NOTE
no. 88

発行日 2016年3月24日（年4回発行）
 発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大
 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門『フィールド・ノート』編集部



母におくる

都留からの贈りもの

お元気ですか。今回は都留の伝統の野菜、水かけ菜を紹介します。

水かけ菜は冬にだけ食べられる珍しい菜っ葉です。育てかたもちよつと変わっていて、米の収穫後の田んぼに畝を作り、そのあいだに富士の湧水を流して育てます。富士の湧水は水温が年間を通じて13度ほど。畑に流すことで冷え込みの厳しい冬でも、水かけ菜の根を凍らすことなく栽培できるそうです。

都留ではお雑煮に入れたり、お味噌汁に入れたりするのだとか。あくがなく、さつと茹でるだけで食べられます。雪をかぶって葉の色が少し黄色に変わったころが甘くて美味しいそうです。

